

書 評

高橋春成編：『日本のシシ垣－イノシシ・シカの被害から田畑を守ってきた文化遺産』古今書院、2010年12月刊、366p., 5, 500円（税別）

近年、イノシシやシカなどの野生動物による被害が顕著になっている。2010年度の農林水産省の報告によると、全国の野生動物による農作物の被害は、被害金額が約213億円、被害面積が約10万5千ha、被害量が約62万tとなっており、これらは年々増加している¹⁾。動物の種類別被害をみると、シカ、イノシシ、サルによる農林業被害がほとんどを占めており、これらの野生動物からの獣害への対応策が早急に求められている。しかし、野生動物と人間との攻防は、現在に始まったことではない。

本書は、かつて獣害へ対処した人々と野生動物との攻防を刻むものとして、現在も一部の地域に残るシシ垣について取り上げた「本邦初のシシ垣の書物（「まえがき」より）」と言える。「シシ」とは、古くからイノシシ、シカ、カモシカといった肉がとれる獣類のことを指し、狩猟により山間の住民の貴重なタンパク源として利用される一方、田畑の作物に多大な被害をもたらす害獣であった。シシ垣とは、漢字で「猪垣」、「鹿垣」、「猪鹿垣」と書き、これらの獣が田畑に侵入しないように築かれた垣のことである。これまで、貴族・豪族・武士などが造った遺構とは異なり、農民が造った遺構に関しては注目されてこなかった。しかし、2005年施行の文化財保護法の一部改正により、「文化的景観」が新たに文化財に位置づけられ、シシ垣も「農林水産業に関連する文化的景観」として注目されるようになった。

本書の特色は、紹介されている資料の豊富さで

ある。シシ垣には、木や竹などを組んだもの、石を積み上げたもの、土を積み上げたもの、自然の地形を利用したもの、落とし穴を設けたものなどがあり、地域により構造・形態・材料が異なる。主として、シシ垣は江戸時代から明治の終わりまで築造されたことが資料により明らかにされている。編集者らは、古文書資料や現地調査等に基づいて、実測図や写真をまじえ各地のシシ垣を多数紹介しており、シシ垣を知らない人でも興味深く読める。

本書は、全部で第4部16章から構成されており、シシ垣の研究、保存、活用の知識・経験に富む研究者・実務家が執筆している。第1部『先人の遺産「シシ垣」』は、「シシ垣の分布と構造（第1章）」、「猪鹿垣遺構を残し伝えるために－香川県小豆島をめぐる猪鹿垣群の踏査と実測の記録（第2章）」、「農民の苦闘を語る砦－三重県紀伊長島の猪垣（第3章）」、「亜熱帯の森に眠る猪垣－沖縄県西表島の猪垣の配置形態と構造（第4章）」、「近江に築造されたシシ垣－滋賀県高島市の遺構（第5章）」、「安芸のシシ垣と地域の歴史（第6章）」で構成されている。日本のシシ垣の分布と人々が獣害の防除対策としてシシ垣を選択した歴史的背景や構造・形態・材料の地域的な差異についてまとめ、主に西日本のシシ垣について詳しく紹介している。

第2部『シシ垣の保存と活用』では、「滋賀県比良山地山麓の土石流災害対策を兼ねたシシ垣とその保存（第7章）」、「岐阜県根尾谷のシシ垣と活断層調査における活用（第8章）」、「群馬県の猪土手－チーム“ししどって”の調査から（第9章）」、「沖縄県奥集落の猪垣保存活動（第10章）」、「福井県奥越地方のシシ垣遺構探しとエコツアー（第11

章)], 「伊吹山の峠に残るシシ垣の保存活動(第12章)」が紹介されている。シシ垣は、地域によっては獣から田畑を守る機能だけでなく、落とし穴を掘って捕まえるわなの役割、土石流・水害からの防護壁の役割、戦時中の避難道、生活通路として利用されていた。これらの利用方法は地域で異なり、かつての地域住民の生活をしのばせる歴史的・文化的に貴重な資料であり、地域の財産とも言える。また、今日の野生動物による農作物被害対策において、シシ垣にみられる先人の知恵や団結力に学ぶことも多く、エコミュージアムやエコツアーの対象としても利用価値がある。こうしたシシ垣の保存には、地域住民の保存に対する意識の高揚と共有、啓発活動、活用方法の確立が重要になってくる。本部では、住民の啓発活動による意識変化、郷土学習や環境学習などの教材、エコツアーなどの企画・開催、地震履歴を解明するための指標としての学術的活用についてまとめている。

第3部『シシ垣を調べる』では、「シシ垣に類似する自然地形(第13章)」、「発掘調査からみたシシ垣(第14章)」が収録されている。シシ垣が文化財として保存されるためには、実測調査や発掘調査などによりシシ垣の歴史的意義や価値を明らかにする必要がある。そこで著者らは、シシ垣と自然地形を見分ける調査、考古学的な発掘調査といったシシ垣調査の方法とその有意性について取り上げている。

第4部『現代のシシ垣』では、「島根県の広域防護柵とその効果(第15章)」、「住民の合意形成によって被害防止柵をつくるー現代版のシシ垣づくりにむけて(第16章)」が提示されている。本部では、現代のシシ垣とも言える防護柵について、その設置方法と管理の成功例と失敗例を示しながら

ら評価している。また、行政・JA・野生動物管理研究機関、NPOなどの外部組織、住民組織、個人による防護柵の設置のための合意形成と導入について論じている。

本書は、主に西日本の事例を取り上げており、東日本の事例がないのは残念である。しかし、これはシシ垣の分布域が野生動物の生息域やシシ垣の構造・形態・材料により偏りをみせているためである。そもそも、シシ垣とは何なのか。それは、編著者の本書の最後「シシ垣は語る」に寄せることばが的確に示している。『私たちは、シシ垣の語りかけに耳を傾け、「生きる」ということはどういうことかを、考えなければならない。そして、その中で、野生動物との折り合いをどのようにつけていくのかを、考えねばならない(「シシ垣は語る」より)』。シシ垣は、「人と野生動物との関係」、「里山の在り方」を考える一つの指標なのである。今、野生動物の獣害が問題になっているが、その関係をもう一度考えなおす段階にきている。それは、昔の人々の野生動物との関係とは異なり、現代のかかえている集落の高齢化・過疎化、狩猟法の改正と狩猟者の減少、生息域の森林回復などによる野生動物の生息数の増加が引き起こす、新しい「人と野生動物との軋轢」なのではないだろうか。本書はシシ垣を通して、「人と自然・野生動物との関係」をもう一度考える一つの指南書としてぜひ読んでいただきたいものである。

(橋本 操)

注

- 1) 農林水産省「全国の野生鳥獣類による農作物被害状況について(平成21年度)」http://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/h_zyokyo/h21/index.html (2011年5月9日最終閲覧)。